

## 「共生」の感覚を取り戻す

上 廣 哲 治

明けましておめでとうございます。

創立七十周年という大きな節目を越え、私たちは新たなステージに立つことになりました。「歲月人を待たず」と申しますが、時間は弛むことなく流れていきます。まさに「一日ふたたび農なり難し、時に及んでまさに勉勵すべし」です。一度、朝が過ぎてしまえば、その日の朝は再びめぐってくることはない。時間を惜しんで学び、実践に励まなければいけない、ということなのです。

先月号で、人間同士は助け合わなければ生きてはいけないと申しました。もつと突き詰めて言えば、生きとし生けるものは、大自然との「共生」なくして命を全うすることができないということなのです。『実践倫理講座・天の巻』に、地球上の生物はすべて助け合い支え合っている、広い意味で「共生」している、とある通りです。

新しいステージの第一歩は、倫理実践の原点に立ち返り、生きとし生けるものと共にあることを自覚した一歩でありたいものです。人と人が支え合うだけでなく、地球上の他の生き物と共に支え合っているからこそ生きていけるのだという「共生」の感覚を取り戻していただきたいのです。

文明が進歩するにしたがって、人間はいつの間にか、それが人間の役に立つのか、利益をもたらすのかなどと、人間を中心にした価値観で物事を考えるようになりました。人間がそこでしか生きることのできない地球でさえ、資源や原料を取り出す対象としかみません。生き物でも、人間に益をもたらすなら「益獣」「益虫」として保護し、害を及ぼすなら「害獣」「害虫」として駆除の対象とします。

このような人間の思い上がり戒める出来事が、四十年ほど前、アメリカのイエローストーン国立公園で起きました。三つの州にまたがる広大な敷地をもつイエローストーン公園には、オオカミをはじめシカやビーバーなど、さまざまな動物が生息して、ひとつの完結した生態系を保っていました。

ところが、人間が進出して牧場をつくり、家畜を育てるようになると、オオカミがその家畜を襲うようになったのです。丹精こめて飼育した家畜がオオカミに襲われるのですから、牧場主にとっては大きな痛手です。オオカミは害獣として組織的に駆除されることになりました。その結果、一九七八年、この地域のオオカミは、ついに絶滅するに至りました。オオカミがいなくなったのですから、公園は家畜を育てやすい場所になるはずでした。

ところがどうでしょう。公園内の植物は育たずに激減し、土壌も浸食され、公園の自然は荒廃する一方でした。原因は、シカが増えたためです。天敵であるオオカミが絶滅したためにシカの数が増え、草木の新芽が出ると、それをことごとく食べてしまったのです。これでは植物が育つはずはありません。ビーバーなども絶滅寸前に追い込まれました。そのため、今度はシカを駆除することになりました。シカが減ると、自然の荒廃はある程度はとめることができましたが、生態系を回復するまでには至りません。どのようにすれば豊かな自然を取り戻せるのか、さまざまな案が出されました。最後に残ったの

が、別の場所のオオカミを連れてきて再び公園内に放すという案でした。早速、議会にかけられると、さまざまな反対意見が出されました。しかし、それしか方法はなく、結局カナダからオオカミを移入し、公園内に放つことになりました。するとシカは適正数にまで減って、植物は育ち、川では絶滅寸前だったビーバーが増えて土壌の浸食が収まりました。生態系が回復したのです。人間が「害獣」として駆除したオオカミは、生態系を維持するのに欠かせない存在だったのです。

私たち人間は、自分たちを基準にして物事の価値を判断します。しかし、私たちが生きていられるのは、実は、私たちの知らないところでさまざまな支え合いと、助け合いが行われているからです。人間には、「大自然の摂理」によって「助け合う力」が、あらかじめセットされています。それを自覚した上で、「共助の実践」に励むことが、「共に生きる」感覚を取り戻すことにつながるのです。

ところで、「共助」について考える時、「誰かを助ける自分」を考える前に、まず「誰かに助けられている自分」に思いをいたすことが大切だと考えます。

「私たちは多くの人々に助けられて、ここに生かされている。その感謝を込めて、今の自分にできることをさせていただく」。このような謙虚な心構えで、「共助の実践」を行うことが大切なのです。

では、何をすることが「共助の実践」になるのでしょうか？ いきなり人のために何かをしようなどと考える必要はありません。まず、今の自分にできることを丁寧に、そして着実にやることから始めましょう。「朝の誓」に基づいて、自分に与えられた務めをきちんと果たす。「朝の誓」を確かに実践することが大切です。「五つの誓」に照らして、例えば妻は子育てや家事などをしっかりこなす、夫は仕事に励む、子どもなら勉学に<sup>まな</sup>勤しみ、元気に遊ぶ。家族一人ひとりが、「家庭愛和」の実現のために、協

力し合って、その時、その場の本分を尽くすことが、「共助の実践」の出発点です。

その上でさらに一歩進めて、人を助け、社会に役立つ実践を行きましょう。身近なところで、できることはたくさんあるはずですが、ただし注意しなければならぬのは、自分は助けているつもりでも、人によっては迷惑と感ぜられることもあるということです。そうならないためにも、「共助の実践」の根本精神である、「させていただく」という感謝の心から発したものでなければなりません。「助けてあげる」ではなく、「助けさせていただく」という精神で相手の気持ちを尊重し、慮<sup>おもんばか</sup>らねばならないのです。その人の立場に立って、その人が置かれている困難を想像し、何が求められているのか、何をしたらいいのかを、的確に判断した上で「させていただく」のです。

地球上に生きとし生けるものは、「大自然の摂理」によって、それぞれが何らかの役割を与えられていて、互いにその役割を果たすことで、他の生き物を支えるようにつくられています。ですから、地球上に生きる物で、価値のないものはひとつもありません。無価値であるとか無駄であるなどと判断をするのは、人間の思い込みであり驕<sup>おご</sup>りです。人間関係においても、「あの人はいないほうがいい」などと、遠ざけたりすることがありますが、実は、私たちは思わぬところで、そのような人に助けられているのかもしれない。その意味でも、人を受け容れ、助け合うことが大切なのです。

そこで今月の実践課題です。何はともあれ、相手をまず受け容れて、向き合ってみませんか。人間は「共生」せずには生きられない存在です。一人ひとりに存在価値のあることがわかれば、あなたの実践に「共生」の感覚が備わってくるはずですよ。

相手を受け容れることは、倫理の実践における「心の身だしなみ」のようなものなのですから。